

翻刻・古賀侗庵『今齊諧』(坤)

高橋明彦

昨年(一九九九年三月刊)に引き続き、古賀侗庵『今齊諧』の翻刻紹介を行う。前号では巻一〜四までを紹介したが、今号では残る巻五、続志編、補遺編を紹介する。

底本たる国会図書館蔵の侗庵自筆本は巻一〜五、続志編からなる本であった。この本とは別に、国立国会図書館には、それらに加えて補遺編を有する一本が有る。今回は、この補遺編を有する本の書誌を示し、翻刻本文は、巻五、続志を自筆本を底本とし、補遺編を別本をもつて底本とする。なお本稿では、自筆本、別本という言い方で、この二本を区別する。

書誌

国立国会図書館蔵・別本『今齊諧』(請求番号六六三三七一三三四) 体裁 写本、変形大本(二六・五×一七・三糎)

員数 正編五巻続志一卷補遺一卷全七巻六冊合三冊。ただし、合綴は現所蔵の国会図書館によってなされたもの。

表紙 原表紙、布目地丁子色表紙で渋引き(刷毛目横)

外題 各冊左肩に無辺の原題簽あり、「今齊諧 一(一六止)」と

墨書。

前付 「書今齊諧前……丙子季夏之月十又一日侗庵獲屈子書、

「自序……文化庚午季秋上澣侗庵支離子撰」

内題 「今齊諧目録」(目)、「今齊諧卷之一(一〜五)」(首)、「今

齊諧續志目録」(目)、「今齊諧續志」(首)、「今齊諧補遺」

(首)

本文 無辺無界、半葉九行毎行十九字、楷書白文。小字双行注あ

り。朱による読点あり。ミセケチ等の訂正あり。

構成 前付、墨付一〇丁(書今齊諧前二丁、自序二丁、目録七丁)

巻一、墨付二三丁、以上一冊目全三三丁

巻二、墨付二四丁、以上二冊目

巻三、墨付二五丁、以上三冊目

巻四、墨付二六丁、以上四冊目

巻五、墨付二五丁、

続志、墨付二二丁(目録一丁、本文二二丁)、以上五冊目

全四七丁

補遺、墨付二六丁、以上六冊目全四七丁

なお、丁付けの記載、および遊び紙なし。

印記 各冊一丁オに、「書下記/蔵書印」(朱文矩形印)、「■氏文

庫」(朱文矩形印)、■は後筆で塗潰し。「帝国図書館蔵」

(朱文方印)、「明治/32・12・22/購求」(朱文横長

楕円印)

別本は、自筆本のほぼ正確な転写本と言えるだろう。その丁移り・行移りまでもが概ね同じであることから明らかである。概ねというのは、微妙に異なる部分もあるからだ。自筆本に較べて、補遺編を持つという事以外は、巻毎の構成・丁数なども同じである。また、自筆本にあったミセケチなどは、訂正されたものを採用してある。

ただし、この別本の筆写者は、筆跡からして侗庵その人ではなからう。用字も、たとえば同じ「すなわち(即・則・乃・便・輒、等)」を一つとっても、ほぼ正確に自筆本に依拠している。しか

し一方で、同じ字であっても、その異体字の使用に関しては、自筆本と別本とでかなり異なっているという印象を受ける。別本が侗庵筆写になるものではないと推測する所以である。

また、自筆本と同じように、朱による読点が附されるが、自筆本とは打つ癖が異なっているように思われる。加えて、自筆本には無かったが、朱で返り点を打つてある箇所も散見する。侗庵本人が自著に返り点を打つことは無かろう。加えて、これが大きな理由だが、別本には誤字・誤写と思われる文字も散見される。転写者が底本を完全に読み切れていないか、あるいは誤写された本を底本としているからであろう。誤写された底本とは、つまり完本が手元に無い、侗庵その人の筆写環境ではないということである。その他、別本には目移りと思しき脱行で後に訂正されているという箇所も幾つか見られる。すなわち、別本は、なんとなくたどたどしい本なのである。また言うまでもないが、きちんとした浄書本の雰囲気を持つ自筆本がある以上、侗庵自身が筆を執って別本を作る必然性も、あまり無いように思う。

しかしながら、別本の存在価値は重要である。この別本と自筆本以外には、私はまだ無窮会本の一本と個人蔵の二本を見ただけで、それらの書誌等について紹介する機会を逸したままであるが、その三本とも巻四までで終る本であった。侗庵が自著を他見無用としたのは、嗣子謹堂の手になる「先考侗庵府君行状」(『事實文編』巻六四)などにも見えるエピソードだが、本書『今齊諧』は、何らかの特殊事情があつて世に出たものであろう。そして、おそらく流布したものは巻四までの本であつたろうと思われるから、補遺編を残すこの別本は貴重な一本なのである。当然、四巻の流布本とは別のかたちで転写されたのだろうし、恐らく、別本の補遺編は四巻本が流布した後には執筆されたのではないかと推測しておく。

なお、この別本は、その筆跡が、巻一から四までと巻五以降とですこし変化している。巻四までは大きめの字であるが、巻五以後は小さめの字で書かれている。必然的に、文字の太さも異なる。

この変化は、同人の別時期による筆写なのか、全くの別人によるものか、判然とはしないが、前者ではないかと想像する。文字の見た目こそ違うが、崩し方や省略の仕方などがかなり近いからである。異体字の使い方も共通しているように思う。

正編(巻一―五)と続志とを文化七年に執筆し、文化十三年に再度補訂した、ということとは前号でも述べた。補遺編については、その後も書き続けていたものであり、本文にも「今茲(今年)」云々とする箇所が見えるが、いずれもその実年代は話によって異なっている。特に典型なのは「龍若君墓」(7-35)の「今茲甲申」(文政七年)や、「白虹貫日」(7-41)の「天保戊戌」(九年)などであろう。文化十三年から天保九年まではほぼ二十年以上の隔りがある。この間、ずっと怪異に関する興味を侗庵が持続しており、常にその執筆時点からの視点で書き足していたと考えていいだろう。

また、今回翻刻して思ったのだが、侗庵の怪異に対する興味の在り方は、純粹な観察者の雰囲気を持たせようとしていると言える。「怪異など存在しない」などと小賢しく合理主義を發揮するでもなく、勿論、怪異を必要以上に面白がり怖がるといった態度でもない。時には、天罰的な怪異現象などについては、その因果関係を感嘆してみせたりする箇所も無きにしも非ずといったところではあるが、それは朱子学的な生活規範の謹厳実直な内面化のなせる業ではあろう。しかしながら、全般に怪異をありのまま受け止める、それを冷静に記述しようとする態度が『今齊諧』の大きな特徴なのである。これは、同話を含めて怪異譚を多く収める侗庵の別著たとえば『劉子』や『侗庵筆記』などが和漢の古典による文献的探究や根拠付けに中心があるのと際立っており、本作『今齊諧』の特徴と言えるだろう。しかし、こうした、侗庵の執筆態度および内容の具体的な検証については、後日を期すこととする。

凡例

一、本稿は古賀侗庵撰『今齊諧』全七巻のうち、巻五、統志編、補遺編の翻刻である。

一、底本は、巻五と統志編は国立国会図書館蔵の侗庵自筆本（特三二八二七―三四）を、補遺編は同館蔵別本（六一―三三七―三四）を採用した。

一、漢字は新字体・通行の字体に直した。ただし、常用漢字以外では正字を残したものもある。

一、底本には朱で記した読点がある。これはそのまま採用し、新たに附さない。また、読点句点の区別もしない。なお、別本を底本とした補遺編は、朱の読点の打ち方が自筆本と異なる。これも底本通り翻刻したが、各話毎の最終の読点（句点）のみは、補遺編にも私に附した。

一、小字傍注、字下げ、欠字や空白は底本の通りに再現した。ただし小字傍注のうち、明解な誤字訂正と見做しうるものは訂正されたものを採った。ミセケチも存するが、誤字訂正の埒内なので訂正されたものを採用した。

一、小字双行注は、へゝで括り一行で記した。

一、底本のママであることを示すために、当該文字の脇に*を置いた。

一、章題に、新たに（5―1）のごとく巻・章番号を記した。統志編は（6―幾）、補遺編は（7―幾）とした。

一、補遺編には目録が無い。「一」でくくり、補遺編の前に私に記載した。

謝辞

底本の閲覧・複写・翻刻許可をいただいた国立国会図書館に感謝申し上げます（平成12年2月18日付け・国図逐第20号、同年2月21日付け・国図逐第21号、翻刻許可）。

本文

今齊諧巻之五

侗庵 支離子 撰

猫一（5―1）

有一士人、佚其名、性酷愛猫、畜一猫、視之如子、家暴貧、身往々糟覈不給、而猫恒飽、東鄰有富人、猫每往來其家、一日富人子、紙裹十金、將奔於筐中、猫直前、以口銜金、走還家、置之士人前、富人拳家惶遽、追至士人家、士人亟返之、富翁謂此即猫所以報君平日愛養之恩也、予不忍奪還、請以遣（1オ）君、士人弗肯曰、某雖貧窶、不肯望報於畜獸也、主人便分其半以贈、士人固辭不得、迺受、渡辺武緒説、

二（5―2）

一士人家畜猫、主人嘗上厠、猫亦從之、逐之不去、打之不退、如此者五六度、主人不勝其忿、一夕懷利刃以上厠、猫復從之、便斬之、忽失首所在、主人大驚、執燭遍照溷中、有一巨蛇、猫首飛置其頭、蛇已斃、主人惘然追悔、已無及矣、上原鴻説、（1ウ）

三（5―3）

奥州会津城下有地、名巷之坊、有遲賓之館、平日殊闐寂、置吏以守、会津士人坂田勝之進、際夕過館前、有老猫当路、勝之進擲以石、猫惶急逃脫、館傍有河、見一老嫗方濯布、勝之進不顧、涉河去、既而以爲今已莫夜、豈婦人濯布之時乎、彼必非人也、復反涉河、以刀擊嫗、嫗躍上臂、瞥然不見、勝之進大驚、方知向者之猫所化也、土屋朗説、（今三条同）

四（5―4）（2オ）

奥州耶麻郡猫代新屋敷村民家、畜一小猫、一日窃肉、家人怒以棍打死、置之廡下、日晚、甦而起去、其夜将中、竈前有何人、頭蒙紅巾、以吹火筒熾火、家人窃窺而大怪、出欲出之、已失矣、其他怪異非一、闔家畏怖、竟夕不寐、如是者連夜、有一人献計、貯魚肉于枯瓠中、實之堂下、猫果入食之、既而不能出、蓋瓠腹大口小也、家人因捕殺之、皆笑其前智而後愚、又謂猫之為怪、不必在其大者、（2ウ）

五(515)

会津小川庄馬風村商人、以事抵越後新方、宿逆旅、夜半眠覺、時家人皆已鼾々睡矣、俄有窾戶聲、商人怪之、窺從隙窺、則有老貓、人立、以前足闔度闔戶、捧食箱而出、所有魚肉、啖盡無余、復捧食箱、納于度闔、以前足闔其戶、令如故、明日主婦呼家僕至前、責其竊肉、且曰、汝之竊肉、非独前夕、數日以來連亡肉、皆汝為之也、僕素戀、不能有弁、唯唯而已、商人聞之、趨至主婦前、謂其非僕罪、時老(3才)貓踞主婦側、商人指示主婦、具述昨夜所見、貓即蒼黃出去、商人大恐、趣治裝還家、至則遍呼家人、告其故、且曰、彼或將來報怨、汝輩宜謹備之、是夕、商人疲倦早寢、夜半驟聞悉窾聲、驚而起、即見向之老貓從亮隔入、欲徑趨商人臥內、商人所畜猫、自外以口銜其後足而曳之、老猫進不能入、退不能出、大窘、商人急擊殺之、蓋馬風村去新方十里許、猫一日而至、又能識商人、真可畏也、(3ウ)

六(516)

奥州耶麻郡吾妻山、与羽州米沢接壤、山多樹木、凡山下民、入山伐木、皆投之澗水、待其流出澗河而取之、憚其來往之煩、往々築一小艸芦于山中、日暮則留宿、曙則復伐、一日有樵人、上山伐木、会昏暮、因入艸芦、閉戶、燒檜柵以禦寒、坐而斫斧、夜半聞剥啄聲、樵人出鷹、則婢娟好女也、謂雪深失路、願得就而宿焉、樵人怪且懼、拒不納、女子堅請、辭氣殊悃切、樵人不得已、許之、女子迺入、面炉而(4才)坐、樵人復斫斧、樵人有時眇女子、則女子閉眼不視、不眇、則女子瞭然直視、樵人察其非人、欲起、以所斫斧擊之、女子急騰身而起、蹴炉火破牆壁而出、夜已旦、見血流竟座、樵人出戶索之、時大雪、血滴雪上、歷々可識、跡其血下山、血到米沢境上民家而止、樵人入其家、如有所請者、主人出見、相与叙寒暄、復入內、謂其妻曰、有嘉客至、何不出心、且汝恒早起、今朝不然、寧有疾病乎、妻力疾出房、見樵人、遽逃出、拳家騷擾、謂其兇狂疾、將追挽止、樵(4ウ)人強禁之、且語顛末、家人因大搜、獲一猫于堂下、傷額而死、

七(517)

上総州人多来都下、仕候邸為奴僕、諸邸大抵別置一舍、以貯其人、名曰上総子舍、讚邸上総子舍中諸僕、一夕睡中嚙語、如被縊者、明日傍舍人怪而問、舍中得無有怪乎、曰無、是夕復然、傍舍人復問、答曰、昨夜独見一小猫跳從窓入耳、曰果然、即此為祟也、次日之夕、復見小猫從樓梯走下、相与(5才)打殺之、自後患絕、元木賢輔說、

八(518)

加州士人篠原庄兵衛、一日踰越山谷、行數里、天已暝、前接巖洞、黝黑不弁咫尺步、試縱田犬前導、田犬向洞口、且吠且退、至庄兵衛前、庄兵衛憤、執犬投洞中、登即為物所噉、不反、少之物自洞中躍出、庄兵衛躲避、令其過、便從後捕之、彼亦相抗、庄兵衛遂以膝压之、刀刺之、死、昏夜不能弁其形、遂歸、明日遣人往視、有一巨猫死於洞前、尾岐成三、下(5ウ)村宗兵衛說、下同

九(519)

山中有一人家、老嫗開茶店以待客、嫗畜一猫、常置于側、庄兵衛每入山獵、輒憩店中、与老嫗語而後去、一日庄兵衛過店、老嫗不在、心怪之、去入山、至幽深之處、見一老嫗死于巖下、旁有一猫守視、庄兵衛怒、急追捕猫打殺之、歸路過嫗家、則嫗子弟聚而泣、庄兵衛問故、曰、嫗死、又問屍有乎、曰失矣、又問所畜猫有乎、曰亡矣、庄兵衛具以所見告、家人(6才)急遣人入山、兒嫗屍以歸、

十(5110)

会津盤梯山猫魔嶽、有一猫、形甚壮大、屢為患、会津士人穴沢善右衛門、一日釣于嶽下澗水、大獲魚、寘于側、指顧之際、大半為猫所竊食、善右衛門憤、遂歸、山中有温泉、善右衛門妻某氏往浴、為猫所擊去、善右衛門聞之、益憤、徧搜山中、將必獲猫以甘心、見妻屍懸在樹上、下有一老父踞地、善右衛門謂曰、汝生長山谷、性習騰躍、煩為我取樹上屍、(6ウ)以予我、老父曰、謹諾、請見借佩刀、当速取以獻君、善右衛門怒曰、此武夫所常服摩者、雖死弗予、老父急騰上樹、罵曰、吾將奪汝刀併殺汝、事不成、可恨、遂攫妻屍而去、不知所之、善右衛門無所施力、悲挽而歸、一日猫

出至大寺村、村人嚇十犬、卒不能獲、土屋朗說、

十一 (5-11)

阿部忍侯第中、前田万吉舍、畜一猫、隣家亦畜一猫、二猫屢相伴、上舍後樹上、自对己影、扑躍飛動(7才)或拳手作招人状、類学幻術者、或見之、以告万吉、勸速逐出、万吉未甚聽信、一日頓失二猫所在、前田經說、(經稱万吉)

十二 (5-12)

上州佐野不動院祠官夜寢、未寐、至人定時、有人在屋上呼曰、吾将赴某氏宴、請与子俱、有人自祠堂中応曰、予不願往、屋上人曰、予不往、則坐無弄笛之人、恐一座為之不樂、祠堂中人応曰、予口傍生瘡、不可以吹笛、子行矣、言畢而寂然、明日祠官(7ウ)見所畜猫、口旁有瘡、大驚怪、戲謂曰、汝口生瘡、得無患不能吹笛乎、猫聞是言、疾走出去、終不復返、椎名維直說、

十三 (5-13)

讚州丸龜步吏某、将往小鷲嘉門家、通経松鼻之地、地在山谷之間、崎嶇難行、猝為衆猫所困、大窘、軀身上松樹以避、猫又魚貫而上、某出死力拒擊、所殺無算、猫互相謂、非小鷲氏媼、不能当斯人、疾往与俱来、某聞而大懼、須臾一巨猫至、某以刀奴(8才)擲之、中背、巨猫逡巡不能進、天曙而散、某乃敢不樹、達嘉門家、聞其媼今朝猝得疾、困臥在床、且不許医診視、某因具陳前夕事、且曰、諸君不信、請以刀奴為驗、家人探室內、果得一刀奴于媼褥下、遂打殺之、媼已死、形尚依然人也、某大驚、謂誤殺人母、罪不容於死、将自裁、一老父固止之、至夕、漸而化、乃彪然一巨猫、蓋家本有主母、是猫殺而代之也、加藤毅說、

天狗一 (5-14) (8ウ)

本郷坊大坂屋者、壳葉店也、店中畜一老僕、名喜八、性謹愿無他腸、一旦為人說禍福、往々奇中、人皆謂其天狗依身、喜八亦自云、依予身者非也、即天狗住龜井戸東北所列杉樹第幾本者也、蓋龜井戸地多老杉、世人亦謂有天狗居其巔焉、乙丑之春、乍謂店中人、明日某時、近地将有火災、宜謹備之、店人皆笑其怪誕、然以其言屢中也、又頗為之備、明日近隣果失火、自是愈神喜八、吏疑其挾

妖術、捕下之獄、一夕不知何人、呼于獄戸外曰、喜(9才)八勿憂、汝審無罪、皇天鑑之、行当赦遣、明日果以罪無左驗被宥、新井駿說、

二 (5-15)

讚州高松賈人家、有一稚女、一日亡之、數日復歸、詰其所往、答云、前者嬉戲門外、有山伏、謂余曰、汝欲觀京師乎、曰固所願也、山伏乃垂背就予、負而去、飛渡播海、其行甚迅速、然飛殊低、足纔離海水、遂經大坂、達京師、周覽靡遺、復歸達家、山伏倏然不見、蓋天狗也、或曰、天狗性愛童男女、好負以遊(9ウ)也、岡晋之助說、

三 (5-16)

米沢大荒山上、安不動尊像以祀、傍有瀑布水、国人有祈願者、必先齋宿戒、然後往浴于瀑、以通虔誠焉、一日常宝寺和尚、携其僮侶而往、竟浴、僮侶皆已出、頓失和尚所在、四顧搜求、見其被支解懸在松樹上、拳云、和尚平生不持守戒律、故天狗殺之也、香坂維直說、

四 (5-17) (10才)

世伝相州大山多天狗、六七月為山開月、都人多往焉、馬喰坊星貨舖主人右八、亦与火伴俱往、裁達山腹、倏爾雷電晦冥、咫尺不弁、但聞右八叫号、謂願免螻蟻之命、又謂腕痛雖忍、脚脛已折、火伴拳皆惕息、不知所為、有頃、雷雨止、見右八已死于林下、手足異处、新井駿說、

方鳳曰、茆山武当泰山、俱有人燒香、不遠千里、不辭勞費、不顧家業、持齋決往、然予聞蘇人之武当燒香者、江中遇盜、死者五人、而所謂真武(10ウ)者、不肯一救、又不見加禍於群盜、及茆山每年燒香、勞甚者多死山下、人曰不誠所致、夫去而不誠、且致之死、則拒而不去者、又何以加之、煜按方鳳所云、茆山燒香致死事、与邦人上大山者、虔誠齋戒、犯遠凌險、欲以求福、而反致為所支解、如出一徹、故附記以覺群迷、丙子夏五、螻屈子識、

五 (5-18)

阿州德島城下有瑞巖寺、々中主僧与弟子雜居、(11才)不得別築上方、築必有火災、有僧佚其名、素有胆氣、新來為主僧、聞之、謂天下寧有是理乎、亟命築之、一夕有人、於天花板上大声言曰、汝築上方、苟完則止、無為輪奐、予今將焚燬之、主僧大駭、已落成、果遭失火盪盡、蓋天狗為之也、四十宮淳行說、(下同)

六(5-19)

阿州老山田織部、頗善奕、遽傲然自大、以為拳国無匹、一日間居、有解魔法師、踵門請曰、其頗解奕、願得見主、從者道令見、織部逆謂曰、汝亦解奕耶、(11ウ)法師唯々、对著数局、織部皆勝、法師謝曰、主之於棋、品格甚高、請而後幸屢蒙晋接、以賜指教、織部笑而許之、法師去、數日復來、謂織部曰、嘿々对局、殊覺無与、請与主約、某輪則主拳打某手、主輪則某亦如之、織部許諾、及对奕、織部連再勝、法師如約、出手於盤上、織部再拳之、既而織部一輸、亦出手如約、法師扼腕怒拳、骨節隆々然起、將打之、織部懼、急引其手、法師誤打盤、々成齋粉、忽失法師所在、殆匪人也、人謂天狗惡織部誇伎而為之也、(12才)織部後有罪家絶、

七(5-20)

讚州丸龜、一日有物自空中下、衆皆仰見之、到地則一隻麻屨也、蓋天狗擊人以行空、而人自遺其屨也、加藤毅說、(下三条同)

八(5-21)

一日有人、孑然立于丸龜府城屋極、城中見之大驚、亟差人捕之、無可使者、國中故有一官、名雜下、掌捕治姦盜、故居此官者、皆通曉武伎、便命其往(12ウ)捕、乘雲梯以登、猶恐其人或盜魁賊渠、虢勇難制、更命步吏二人、持綁邀其前、使彼專意于此、乃從後縛而下、其人已痴矣、飲以良藥、數日稍復故、茫無所記、詢其本貫、則阿州人也、因送歸之、蓋為天狗所擊也、

九(5-22)

高松侯侍医秋湖、佚其姓、從侯出府、舟行抵室津而宿、一夕為物所負、渡海而還家、殊不自覺、蓋天狗使然也、竟坐禡職、或云、秋湖最長于奕、爾後頓(13才)退二子云、

十(5-23)

丸龜与高松相違七里、土岐川以往、地勢阻隘、饒樹木、人無夜行者、丸龜人市川曾弥太、有故夜向高松、既經土岐川、至一大松下、驟覺毛髮竦豎、肌膚生粟、遲疑欲歸、即見有天狗踞松樹上、微笑曰、汝慮甚善、曾弥太大恐走歸、

狐一(5-24)

佐藤甚五者、米沢人也、仕而食邑、邑違家甚邇、甚(13ウ)五家懸磬、逼歲除、之邑人家借貸、邑人以其主、極善待之、飲膳豐美、魚肉錯陳、甚五不能尽噉、仍包以茅、持而出、既而甚五家人怪其歸晚、託人往求、于時積雪新霽、弥望皓然、田畔有清泉、灑々流出、數尺之間無雪、甚五方裸而浴、其人見之大駭、大聲疾呼、甚五但言、歡樂如此、奚驚我為、再三呼、甚五怡然如故、其人不得已、褰裳蹊田、捉而出、打數十下、始寤、詢其故曰、始出邑人家、道上遇親友、迎入其家、供給豐備、腹已果然、因勸我浴湯、俄而被(14才)打、蓋狐利其肉、誑而奪之也、香坂維直說、

二(5-25)

小倉侯下谷第中、一日失宦女一人、拳宮大搜、不獲、遣人往求之、女家、又不在、遂止不復求、于時秋八月也、入冬、宮中老内人、晨起如廁、瞥見有人、自堂下、以花蛤殼承所盥水而飲之、急呼宮人、捉而出之、則所亡宦女也、責問其故、曰有美少年、誘我到其家、堂室輪奐、飲饌豐備、樂不可言、數日前、忽失少年所在、自是大困、不堪渴甚、出而求飲、因至(14ウ)此也、凡自八月涉十月、只著一單衣、以居堂下、不自知其寒、既出、財三日而死、蓋狐誘而與交也、池田權三郎說、權三郎即小倉侯臣也、

三(5-26)

予祖舅光增君、嘗往友人家、家本甚邇、然越山涉水、雲樹峯巒、隨望交尽日行而未至、光增君察有異、急踞地、閉目不動、少之開目、則前途歷々可識、隨而往、竟得達友人家、蓋狐欲誑之、曾祖舅明悟而卒不能也、(15才)

四(5-27)

下總神敷之民、有五郎者、淫蕩無行、独捕狐、極其妙、州中小金原多狐、五郎之將捕之也、携挺長六七尺者及一網与魚肉以往、先

提所携魚肉、周行原中、訖、委肉于地、佯寢其傍、以待、須臾狐來窃食其肉、五郎便突起、以網掩之、挺打之、往々有獲、嘗網一老狐、々大窘、騰躍欲出、火自口中出、亦終被打殺、新井駿說、

五 (5-28) (15ウ)

米沢彌方三城外路多狐患、行人往往為狐所排擠、陷于濠塹以死、号曰擠狐、蓋夜間過此者、覺路傍人家墻壁突出、碍人行、道途窄隘、不得已、漸々退避、至岸上、不覺身已陷濠中、遂溺死、香坂維直說、(下二条同)

六 (5-29)

金田友右衛門者、羽州米沢士也、家与狐王廟隣、一日見老狐寢于戶外、戲折一樹枝闕弓射之、貫戶、狐驚逸去、友右衛門還、驕家人曰、今日吾驚破(16才)老狐胆矣、是夕既寐、中夜推枕歎起、呼曰、失火、家人亦驚起、拳笑其妄、友右衛門怒曰、火已延燒堂奥、汝等何為晏然不救、趨下庭、以綆汲井、桶盛水、徧播灑堂上、家人益駭、禁之、不聽、久之乃止、時方坐寒、堂上水登時變冰、寒不可耐、皆移寢于別室、明日友右衛門始復故、方悟狐復怨也、

七 (5-30)

米沢真光寺多狐妖、香坂維直幼時、嘗与年友波形敬藏相伴還家、過寺門、見老狐臥橋上、二人戲(16ウ)拳所持挺叩地、以駭之、狐驚而逃、二人行、未至家數百步、猝見有灯籠、不記其數、高者或十丈許、填滿前途、二人相謂曰、里中得無有死喪乎、何設陀摩之多也、蓋国人一家有死喪、同里閭家、為設一灯籠、以掛于簷外、名曰陀摩、少頃方悟狐為之、恂然有懼心、急喚起路傍舖舍吏、護送達家、

八 (5-31)

会津士人上遠野弥生、將網于黑河、褰衣涉水、上前岸而網、日纔過午、俄爾昏黑、河水暴漲、急流如(17才)箭、弥生怪懼欲還、河深不可涉、將由橋、遭送葬者從橋上過、留而待、既而送葬者累々相繼、入弘長寺、移時始尽、弥生方得渡橋、達家則尚未暮矣、蓋狐為之也、樋口光大說、(下同)

九 (5-32)

会津士人平田四五右衛門、与諸友遊大沼郡伊佐須美祠、道上有鶴沼宮川二川可涉、自他川皆橋、四五右衛門等歸路已涉二川、又逢一川無橋、大駭、語其友曰、二川不已涉乎、皆曰、然、四五右衛門(17ウ)門曰、是狐誑我也、若涉必遭陷溺、不如止于此待明而歸、吾且驗之、持手中浸于川、水逆流、与二川不同、遂止不渡、天已曙、果無川、迺歸、

十 (5-33)

会津酸川上民、臨川將濟、有人來、衣服楚楚、類士人、持一鳥銃授民、謂吾將涉川、此吾家重器、恐為水沾濕、煩汝為我持以達前岸、民扶服奉命、半涉、所持鳥銃、無故自動搖、民覺有異、極力投之水、銃忽化狐而走、蓋狐懼涉水沾濡、故使民捧持其足(18才)而濟、可謂黠矣、土屋朗說、

十一 (5-34)

鈴木白藤親眷有一女子、嘗為狐憑其身、医治請禱、莫所不至、竟不痊、一日家人、視女子手皮膚墳起如有物入者、大怪、急趨持其腕、緊縛其前後、物在皮中、騰躍飛動、如路絕而窘者、家人以刀刺之、有氣出、如一線煙、自是狐崇絕、

十二 (5-35)

上州佐野有一稚女、与火伴一人遊涅槃寺、稚女(18ウ)先入戲以糸貫海石榴花、欲使其累累若貫珠、而數未充、徘徊之際、有一男子持海石榴花來、予稚女、稚女喜而受、男子右手授花、左手緊持女子、曰、吾既以斯花贈汝、將復取償于汝、稚女大叫、仆地、火伴趨入視、已絕矣、久之得甦、問其故則曰、彼欲以手抱持我、吾視其手、生毛寸許、吾駭懼而絕、蓋狐狸之屬、化男子以誘之也、稚名維直說、

十三 (5-36)

狐火今人多見之、而不知其何術致之、或云、狐然(19才)火尾上、謬妄可笑、然段成式諸臆記云、旧說野狐名紫狐、夜擊尾火出、則其說之來旧矣、今狐王廟前、以石作狐口中銜珠、此未必實悉其狀而造之、然其火則珠實使然也、祭酒林公為予說、某人家藏狐珠、塊然如小荷囊、外面徧生毛、詰其所由得、曰、夏秋之際、狐夜出

于田間、食蝗、闇黑不可弁、便出此珠、煜然有光、以前足軛之地、以照蝗而撥之、當爾時、人藏身于傍林叢中、猝突出逐之、狐倉皇遺珠而走、因獲之、但狐持之則有光、人取之則無光、理誠有(19ウ)不可曉者、

十四 (5-37)

庚午之夏、麻布之地、為狐所斷髮者甚衆、宇和島邸中士人舍、有婢、一夕灯下裁縫、竟有物倚背、以手摸索鬢上、触狐頭、急緊持其足、狐大窘、嚙斷婢小指、婢少撓、極力压狐于膝下、大呼主人、主人趨出、拔刀刺殺狐、自是狐患絕、六月間事也、前田經說、嘗聞數年前、都下有解魔法師、能使狐、令之截人髮、便禿符章、命狐不截買符章者髮、一時大(20才)讎、獲利不貲、既而發覺伏誅、今之狐患、得無有使之者乎、

十五 (5-38)

肥州深濠邑一士人家僕、昼鋤菜園、力穡、戲蒙紅巾、拊舞、自適、傍有一狐、見之、踞地注視、若有會意、僕知之、愈舞不止、狐漸親近、會無疑懼、僕將待其近己、擊而殺之、猶予之際、家人從墻隙覩見、謂其為狐所誑而然、急出逐之、狐蒼黃逃法、僕扼腕悵恨者久之、田代富五郎說、(20ウ)

貓 (補遺) (5-39)

北越一士人家、有僕、謹愿無他腸、主人甚委任之、一日際晚、僕倚門而立、有女子過、容色不凡、僕心動、戲問曰、佳人任何許、答曰、妾家即君宅東南數百步某氏、是也、僕試挑之、女欣然承受、略無忤意、便期以昏黑、僕返舍而待、少選女至、情意殊纏綿、自是每夜必至、僕心神疲憊、腰帶日減、其友察其有異、詰之、僕曰、無有、固問、乃具說所由、友大駭曰、此宅東南數百步、未始有某氏、必妖魅也、吾請為(21才)之所、是夕、酒鳩合同志者六七輩、單僕舍傍而覘之、初更有物來、蒼毛金目、諦視之、彪然一大貓也、相与攘臂趨之、貓直入僕舍、即聞僕叫号一声、遽執燭而入、貓已出去、但見僕身被決裂、血肉狼藉、已絕矣、大塩詢說、

狐 (補遺) (5-40)

長州有一士人、喪其耦、傷惜殊甚、一夕扞于祠堂前、見一鬼婦現

于香火土、面目儀貌、全然故妻也、泣而謂曰、幽明雖異、飲食則同、妾自下世、累旬日(21ウ)不飲食、飢不可忍、君誠不忘旧日同夢之好、請少垂憐而給濟焉、士人益感歎、每夕具妻平日所嗜好之物而奠之、鬼出瞰之、一舉靡遺、率以為常、經旬、妖跡頗露、士人竊懷小銃、候其出、擊中其額、鬼退、明日之夕、復拜、鬼出而責曰、君何無情而忘故之甚也、士人諦視之、額有一丸痕、宛然、復擊中其額、鬼退、又明日之夕鬼出、額上二丸痕、歷々可弁、士人驚愕、迺直擊其足、倏然祠堂中喧鬧、炉翻灯滅、有物出而死階庭、視之彪然老狐也、州人小田(22才)明說、(丙子補)

二 (5-41)

人為狐所憑、驅之之法、惟縛其人、強飲以木髓、最有神効、医多紀安長家婢、為狐所憑、治之百方無驗、乃用此法、其人即哀懇求去、更強飲之、卒然倒地、而狐已離身、奇矣、此法當公之天下、以博其施、安長說、(丙子說)

三 (5-42)

本所有壳文蛤為生者、每晨以兩魚籃盛文蛤而(22ウ)担之、沿墨水行、至三團山畔、動為狐所奪、甚患之、而無如之何、一日至此地、聚覺精神昏昏欲睡、少之復故、則魚籃已空矣、始知狐取文蛤、每用此術也、又明日抵三團祠門前、勉自策其心神、令惺々、而外彷徨次旦、陽作思睡之狀、遂委籃于地、持天平棒、立而假寐、少選小開眼觀視、即見有一老狐、直沒頭于籃中、而瞰文蛤、悠然嚼啜、傍若無人、其人急以所持天平棒打之、立斃、嗚呼彼以為天下之人可常欺誑而奪其利也耶、祭酒林公說、(丙子補)(23才)

四 (5-43)

羽州山形民某入山、見狐捕獲雉、蔽于樹而伺之、已而狐抱雉弄之、指顧之際、雉呱呱為赤子、而狐則嫣然妖麗一女子也、徐々而行、某竊以為狐之誑人、拳用此術、吾必有以困彼、々烏能誘我哉、尾而從之、女子至山下村、挾一人家而入、某從壁隙窺覘、即見家人迎謂曰、汝勞乎、吾遲汝久矣、女子拜謝、某謂其拳家為狐所愚弄、將告以故、而不得聞、遲疑之際、見戶外有僕舂米、便謂之曰、向之女(23ウ)子即狐也、非人也、吾已究知其蹤跡、不敢不告、僕

大怒曰、風漢無礼、敢誣吾家姐々為野狐、不可不痛打以懲後、拳挺擊數下、某仆于地、如悶絕者、少之有人來、大声呼号、某驚而寐、則身已陷在溝滄泥潭中矣、方始覺終始皆為狐所誑也、尾関介說、(丙子補)

猫 (補遺) (5-44)

長府士人田沢多左衛門家、畜一赤斑猫、形極壯大、或謂其能變形為怪、多左衛門不以為意、一日自外至、見猫在屋上起舞、始大驚怪、亟入室、懷利(24才)刃、貯飯肉于器中、以啖猫、左手持其項、右手搥之、手驟痿痺不仁、刃自墜地、猫得免去、右手遂廢、不能復故、小田明說、

狐 (補遺) (5-45)

佐賀士人某、家在山林窮僻之地、狐穴其園圃中而生子、頗妨為圃、僕患之、以告其主、家有一老嫗、素性酷虐、聞之曰、除此易々耳、亟命以大釜燂湯、候其涓沸生蟹眼、盛之以盤、持至園圃、沃之穴中、狐子數頭悉爛死、一老狐纔而得免、一夕老嫗上(24ウ)廁、狐自下以竹刺、傳其肛門、老嫗遂病傷而死、(丙子補)(25才)(25ウ)

今齊諧統志目錄

老嫗魂歸于天

蛇復怨

獲魁

湯神

金精

二

猫断人髮

芦葦中婦人

字化血

那須野蜃氣

異火

大蒜驅疫神

蛇有足

陰火

川越城中妖婦

石飛墮室中

頭鬻堤草

古墓有靈一

板行兇

殺蛇之報

中山城之怪 (26才)

酒塊

秋田三吉

死人揺手

天女過空

廿日山之怪

祠樹為祟

地底有聲如雷

捕鬼燐

狸作人言 (26ウ)

冤鬼化蛇

灯臺自碎

土中生魚

今齊諧統志

老嫗魂歸天 (6-1)

伺庵 支離子 撰

乙亥七月十四之夕、予与書生輩譚論于南塾、時月色清明、四顧如昼、見一火团大如毬、飄々揚々從文廟側畔出、色如金、燦爛炫目、至門前市上而滅、在坐者六七人適在坐隅、拳不得見、野田生聞予言趨出視、則火寢微將滅之時也、明日東隣豆腐舖老嫗死、所見之火、蓋即老嫗之魂、歸于天也、(27才)然以予所聞、人魂皆色青、而遺光如線者、今皆無之、豈月明故然歟、予生二十九年矣、所目擊之怪、止此一事、前一夕、有東市二少年過東隣豆腐舖、時夜已寅時、見傍堤上有婦人、蓬頭乱垂、白衣而立、大駭殆絕、疾走投一市人家、或云、此亦嫗之魂為之也、

陰火 (6-2)

鷹下士森彦太郎、養直之丞為子、伝家而老、彦太郎貪暴、与直之丞惡、一夕与語、醉以酒、刺而殺之、(27ウ)事聞、彦太郎配流海島、家絶、先時一夕、森家庭上有火然、如炬、少之蔓延、燒林木、光照室中、近地望火樓報失火、已而火忽然燼、就見、則庭上草木初不焦焚、蓋陰火也、數日而直之丞見殺、

蛇復怨 (6-3)

石州津和野士人、將往釣于河、而無竿、見道傍有一竹林、捫其可以作釣竿者而斫之、已而方知有蛇纏竹幹、併蛇斫之、而失首所在、追悔無及、披草索之、了不能獲、遂持竿出林、竟釣而歸、他日過此(28才)地、時適夏暑、渴甚、欲飲于河、忽記得前日斬蛇事、以為蛇性陰隱慘毒、能久而報怨、或能害我、顧渴甚不可忍、迺下于河、以帨巾濾水而飲之、驟有一蛇首飛來、嚼其手、急以帨巾纏燒之、持歸焚之、然士人卒病傷而死、市川仲藏說、

相州多田有人、一日刈草于庭、誤斷蛇首、而未之知、及見蛇蜿蜒地上而無首、方始知之、悔已無及矣、即披草覓其首、卒不能獲、刈草已畢、渴甚、近池有清泉、往將掬水而飲之、見有腳數十(28ウ)百驟水中、急還家、持網往網、悉獲之大喜、持婦、招致諸友、將烹而共食之、已熟、見油膩大浮于上、衆頗怪之、一友詰所由得、其人告以所網之地、且及殺蛇失首事、友人曰、吁可懼哉、吾聞蛇亡首者、必能報怨、子網魚之泉、平素絕無魚、今而多有、無乃蛇首之所化歟、其人懼、亟棄腳于庭、又一日獲菌之鉅而美者若干本於庭、復會友人、俱煮食之、向之友亦至、復見油膩大浮于羹上、友聞其生于庭、愕爾曰、豈非前日棄腳之(29才)地乎、其人始悟、獲菌之地、果棄腳之地也、大懼竟不食、此人幾死者再、皆為友人所拯濟而免、可謂幸矣、鈴木孔彰說、

川越城中妖婦(6-4)

明和四年閏九月、山形侯祖化城公、自川越徙封于山形、蓋左遷云、初侯在川越、一日、有三士、當直在城中広間、看守、迨夜將半、遙聞履声囊々、從庭上過、三士俱疑怪、以為中夜庭中、安得有人行、豈番卒等有所巡視乎、已而履声漸近、直扶戸而入、(29ウ)視之、一老宮人也、其長丈許、頭髮亂垂、躬著十二重禪衣、徐々而至、旁三士曰、諸君看守、甚勞甚勞、言畢而出、三士將共拔刀擊之、而身戰悸縮胸、如被拘束者、口不能出一言、惟手握刀欄、互相目撰而已、老宮人去遠、三士始得開口語、是夕三士遂俱終夜不寢、以迄明、明日遷封之命下、

獲魃(6-5)

文化癸酉閏十一月、筑前三笠郡山中、下谷屋舖之地、有一奇獸、射而殺之、作囟伝於都下、予亦一(30才)覽、獸才然竦立、身長三尺五寸、尾長三尺八寸、一目一手一足、手足各三爪、手長三尺、耳鼻口皆具、口大而齒銛利、渾身有黑毛、鬣鬣下垂、惟面及手足端無毛、蓋魃也云、

煜按東方朔神異經曰、南方有人、長二三尺、袒身而目在頂上、走行如風、名曰魃、所之國大旱、俗曰旱魃、一名格子、善行市朝衆中、遇之者、投著廁中、乃死、旱災消、詩曰、旱魃為虐、

或曰、生捕得殺之、禍去福來、其錄形状、略与筑前所獲者合、(30ウ)

石飛墮室中(6-6)

山形俗、每歲二月、有重歲之礼、至日、家々會親戚友朋、宴飲語笑、蓋再行元正之礼之意也、有一士人家、嘗行此礼、歡宴入夜、驟有火、大可一尺、其勢迅猛、声如疾雷、直飛入室中、拳家驚駭逃散、無一人敢留者、迨明入視、則有一巨石尺許、墮在室中、石理密緻、而極光沢、他無所見、尾関介說、

按沈存中夢溪筆譚曰、治平元年常州、日禺時、天有大声如雷、乃一大星、幾如月、見于東南、少時(31才)而又震一声、流著西南、又一震而墜在宜興縣民許氏園中、遠近皆大火、光赫然照天、許氏藩籬、皆為所焚、是時火息、視地中有一窟、如杯大、極深、下視之、星在其中、熒々然、良久漸暗、尚熱不可近、又久之發其窟、深三尺余、乃得一凹石、猶熱、其大如拳、一頭微銳、色如鉄、重亦如之、今山形隕石、蓋与此同、其不能有焚燒者、豈比入室、火已燼而然歟、游芸曰、流隕慧孛、皆火也、火氣從下、挾土上升、不遇陰雲、不成雷電、凌空直(31ウ)突、至火際、火自歸火、挾上之土輕微熱燥、亦如灸煤、乘勢直衝、遇火便然、狀如藥引、今夏月奔星是也、其土勢大盛者、有聲有跡、下及于地、或成落星之石、初落之際、熱不可摩、如挺器初出、若更精厚、結驟不散、附于晶宇、即成慧孛、芸之言如此、可謂善談天矣、

湯神(6-7)

米沢有温泉、名赤湯、人多浴焉者、然禁丑刻後入、謂過此必為湯神所殃、有一士人嘗往浴、士(32才)人有宿疾、積久不差、意欲其亟愈、夜過丑猶浴、已而逮明不出、主人怪之、入視、則士人肩背刀疵如織、而已絕矣、抱而出於湯、予以藥、少之甦、問其故曰、予始入、則先已有人浴、逆謂我曰、君何胆氣之壯也、乃能不畏人之所畏、士人唯々、自是迭相応答、意殊懇切、其人復謂我、某請為君洗背、士人拜謝、以肩就之、其人以脫巾洗滌、快不可言、已而昏然如夢、不記其他、尾関介說、

頭鬻堤草 (6-8) (32ウ)

石州津和野柳里民二人、与一富豪争訟、富豪曲而二人直、富豪行賄于吏、吏迺蔽獄于二人、二人坐誅、臨死、二人俱謂行刑者曰、吾理直而不獲伸、怨通于天、死必有以報富豪、吾頭殊、必飛鬻前提上草、以表吾無窮之恨、已而吏行刑、頭纔離身、即飛著提草、奮勵嚼嚼、猶有含怒狀、未幾、富豪家道日落、遂滅、他人來処其家、猶然怪異不為衰止、市川仲藏說、

金精 (6-9) (33才)

香坂維直舅父橋爪某、一夕有所往、從北野明神祠側過、此地樹木環合、人跡稀少、時天已昏黑、有火一團、飛來墜於林中、某遙識其処、命僕往視、僕恐怖不敢往、某迺親往、披荆棘、撥草莽而索之、獲円金二塊、持而歸、更補足金若干、命工装刀飾、其刀今猶見存、香坂維直說、

古墓有靈一 (6-10)

坂崎出羽守墓、在石州津和野永明寺、出羽守者、即昔日封石州之地者也、墓畔也、相伝不許人 (33ウ) 踐踐及掃除、謂犯者有殃寺僧嘗以墓上蕪穢、命人芟治、其人即病瘡、久之方差、市川仲藏說、
(下同)

二 (6-11)

津和野侯之先龜井武藏守、封於因州之鳥取、其廟猶存、至今靈驗益赫然、人過廟前者、不得騎馬、騎輒蹶而墜地、鳥取侯嘗獵于野、鷹逸而集于廟上、命侍臣取之、侍臣馳至廟前、欲直取之、拳体畏縮、如束縛者、不可輒動、使人告謝廟而後解、津和野侯、歲使人至鳥取修廟掃墓、中老将役夫往焉、(34才) 役夫嘗妄蹴踏墳墓、拳動不敬、驟覺拳体蓄縮、不可執事、大驚懼、亟謝廟、然後得止、

播州三田、有多田滿仲廟、村中得有災變、輒廟震動有声、白須文明說、

煜按、大抵墳墓祠廟之属、其古者、翻多靈驗、蓋其始也、小有靈驗、則人稍尊信之、歲月已久、尊信者、雜沓累至、則天下人之精神四萃于此、而靈驗益赫々、如関帝天妃之不甚靈於古、而大靈於今、亦此理也、(34ウ)

板行児 (6-12)

武州足立郡浦輪之地、一民、有子五人、相繼悉夭、家人憂之、最後一子始死時、燒当四錢、令赤、印其臂而葬、蓋世人謂如此則宜後生子也、無幾、妻復孕一子、甫誕、臂上有燒錢迹、歷々可弁、已而獨是子得不夭、里人呼之、不称其名、而謂之板行児云、新井廷錫說、

猫断人髮 (6-13)

丙子之夏、城東之地為狐所截髮者比比、有一士 (35才) 人、与其隣至睦、隣有老猫、日往來士人家、一夕士人家老嫗、擁抱幼女頭作夾囟者而寢、已熟寐、猫潛來、嚙断幼女夾囟、將復嚙断老嫗髻、口纔接髻、而嫗驚寤、起而追之、獲諸其隣、速命棄之、狐之断髮、世所屢有、猫之断髮、今始得聞、可謂怪矣、中神君度說、

殺蛇之報 (6-14)

山形藩臣尾関介叔父某、出後寺島氏、家在城下七日坊、某早沒、其子亦夭、遺一女、歸養於尾関氏、(35ウ) 寺島氏家絶、檢近地長源寺鬼録曰、七日坊之宅、昔時他姓人居焉、世世早夭、家絶、而後歸寺島氏、寺島氏亦世夭、至某、家亦遂絶、初他姓居此者、其先好殺蛇、其殺之也、以紙燃包消石、^(火藥) 挿蛇口中、然後点火、火發、蛇腹裂而死、凡殺蛇数千、由是報怨云、尾関介說、(下同)

芦葦中婦人 (6-15)

山形人某晨出、釣于河、至水畔、有芦葦叢生、不可釣、河流芦葦之外、繞芦葦而出于河、則頗廻遠、從 (36才) 芦葦中過、則甚捷徑、便以手扶芦葦、衝泥而行、聞相距數步有兒啼声、甚怪之、于時朝纔弁色、佇立而潛窺、有一婦人焦瘦枯槁、皮骨相支、髮乱垂被体、飄然如影浮坐芦葦葉上、抱兒而哺乳之、其人見之、駭懼幾絶、疾走而歸、

中山城之怪 (6-16)

米沢之中山城、歲遣人更番往守、相沿謂、城中高殿、不許人止宿、止宿輒見怪、一歲藩臣大國左門 (36ウ) 往守、左門有胆氣聞高殿有怪曰、此奚足畏、一夕故寢于此、夜将半、驟聞悉窣声、左門大呼曰、吾已勝矣、家人大駭、趨往視之、左門方起坐、扼腕、氣息

沸然、汗淫々滴、衆問故、左門曰、有一婦人、翩然來、欲与我闘、我出死力、与之确、纔而得勝、婦人忽然不見、左門精神恍惚、不能自支持、久之方復故、香坂維直說、

字化血(6-17)

山形藩臣尾関某為林奉行時、其属有草井与一(37才)右衛門者、為名主、其所識松原村民、娶妻、有孕、民素貧、終歲拮据、纔能生活、度産子力必不給、遂舍妻而亡命、与一右衛門因養其妻于家、未幾、妻不能婉而死、自是鬼屢現、家人拳見、独与一右衛門未見、已而託近地某寺行法事、書其名于紙、將焚之、俄頃所書字悉化血、遽内之于懷、再書、化血如故、三書不化血、方始焚之、時適白昼、有鬼、赫然從煙中出去、与一右衛門亦親見之、尾関介說、(介某之子也)

酒塊(6-18)(38才)

町奉行永田備後守臣某、性嗜酒一日將飲酒、胸中作惡、不可忍、即吐出塊紫紅色者二、方驚惶之際、塊蠕々然動、須臾化為小虫、凡數千萬、一一生羽、翩々飛去、存者無幾、某急以櫻櫛帚打之、獲數頭、嗣後胸次豁然、飲酒如故、虫形色如赤小豆而有翅、猪飼斗南目擊、為予說、

那須野蟹氣(6-19)

文化丙子、上野那須野之原、屢有如蟹氣樓者現、現每以清晨、蟹氣樓多見于海上、而未嘗有生於(38才)原野者、人因唾伝以為異事、或遂刻其事于石、以立于原上、按天経或問曰、凡海旁蟹氣象樓台、広野之氣成宮闕、此氣亦猶空中濕氣倒映水面之樓台也、濕氣映者影也、而雕鏤彩色逼真、海中現蟹樓者、其氣微似樓台、一湧而沒也、以燈所聞、凡於海上及広野成樓台宮闕之狀者、皆近地城市倒映空中之氣也、二說不同、而其為天地間當有之物則同、則那須野所見、似不必深怪、然在本邦、則見於広野者、蓋今始有之、從未前聞、其多於海(38ウ)上而少於原野者、豈以原野不如海上積氣之多故歟、

秋田三吉(6-20)

羽州秋田山中有入、名三吉、蓋山氣之所生也、長丈許、膂力絶人、

性好勝、恥挫於人、有樵父入山伐木、伐多而力不能搬運、求助于三吉、三吉能為致之、秋田城下作角觥戲、以觀乎人、十日為期、必九日而止、蓋盈期、則至日、三吉必親來求角力、蓋其好勝根乎天性也、尾関介說、(39才)

異火(6-21)

土州山中有火、名計知火、方言蓋異火之義也、每當雨火而出、其形極小、点草間、如螢火然、人呼之則隨声而來、故遇之者、必寂然鉗口而過、州中少年數人、嘗夜乘舟、下河、相謂曰、俗伝異火呼之立來害人、彼瓊々之火、何能為、乃齊声一呼、火登即飛來、止于舳、驟覺舟重欲沈、舟人驚遽、以槳痛打之、火散於水面、点々如星、舟始輕、士人馬爪清平夜釣於神如寺門前、亦嘗遇此火、止於傘上、(39ウ)重不可勝、傾傘而墜之、迺免、州人和氣翼、從家君遊、歸鄉、嘗与其友遊於城北之山、入夜見、此火在草際、以為吃烟余燼之未滅者、欲以問其友、其友遽掩其口、乃止、而此火竟莫、其何所生也、和氣翼說、

死人揺手(6-22)

摂州三田民某、姉在同州灘之地、為人婢、病死、某至灘、負其屍以歸葬、道經六甲山、山路巖險、樹木森邃、号称多怪、時天已曠黑、風颯々振林木、背上(40才)死人、時々以手掩某目、或納手某懷、冷徹肌骨、某有胆氣、未始少驚怖、知有物憑死人身以為妖、大声言曰、汝等間暇無事、乃為此等遊戲、吾遭罹家艱、跋涉遠道、心遽力憊、忍相厄邪、自是、死人寂然、遂得達三田、白須文明說、

大蒜驅疫神(6-23)

米沢藩臣丸山茂兵衛妻芋川氏、弟内記及其家人、病疫物故者數人、繼而氏病、危劇不省人事、一日蹶然起坐、宣言乎衆曰、吾已殺芋川家某々、以(40ウ)来于此淹留多日、吾心厭之將去而遷于夫族某之身、言纔卒而頽然復臥、茂兵衛速命多積大蒜而燒之、以薰氏身、少之氏起而言曰、吾已不得近夫族某、將投左近治和三郎之身、言卒而仆、和三郎藩士人也、茂兵衛復以大蒜薰之、氏復起而言曰、吾所欲託身者、今皆不得往、可恨可恨、已而仆、昏然如故、旬余而差、嗣後疫無所伝染、亦異矣、香坂維直說、

天女過空 (6-24) (41才)

佐賀一士人妻、夜坐于軒、時天淨雲収、月色皎々、無鉄翳、有天女、羽衣翩躚、環珮玲瓏、儀態服飾、全如世俗所凶天人者、侍婢數人左右擁衛、飄然掠空而過、祥雲瑞氣、霽々從之、妻急呼家人、家人趨而至、已失矣、猶及見雲氣之氤氳、井内収説、

蛇有足 (6-25)

都城守門吏數人、嘗夜聚首而譚、驟聞燕巢中燕騷擾殊甚、察其有異、趨就視之、見一巨蛇方耽々伺巢、大怒、速捕之、縛於梃、々々長六尺、而蛇尾猶出(41ウ)於外其大可想也、遂熾火炙之、蛇困苦露足、卒死、野沢彦六説、

煜按陶隱居曰、蛇皆有足、燒地令熱、以酒沃之、置其中、足出、段成式曰、蛇以桑柴燒之、則有足出、朱翌曰、余在曲江、老兵捕一蛇燒之、四足垂出、如鷄足狀、此足以証野沢之言非虛、予又聞有人以刀截斷蛇首、蛇怒而向己、因而足出、遂斷其足而藏之、乃知蛇痛苦則足自出、不独火烧、又不必勞沃酒用桑柴、其火烧而足必出者、(42才)亦惟痛苦最甚故也、

廿日山之怪 (6-26)

播州三田之廿日山、極巖險峭深、山巔有祠、多怪、人莫敢夜往、三田士人正田小十郎、有一深願、欲祈于祠、迺夜往宿焉、会内逼欲出、四顧則亮隔骨間糊紙処、一人面、方瞋目窺内、而大風發屋、四山震動、小十郎驚懼、躊躇久之、遂出、則天色清朗、未始有風又未始有人、退而入内、則怪異如故、小十郎静心定氣、勉自策勵、遂留二日而後帰、語人(42ウ)曰如廿日山之怪不但未嘗見、又所未嘗聞、吾不敢復往矣、然人服其胆、白須文明説、

祠樹為祟 (6-27)

文化癸酉十二月、吹矢坊劇場遭延燒、將改造、求巨材可以作梁者、百方不獲、卒遣人往程谷、伐杉山祠旁松樹三株以供之、方伐松時、推倒木、誤压壞祠堂、祠堂遂廢、棄而不復修造、既而劇場凶禍相踵、日就衰替、衆謂祠樹為祟、劇場主人懼、丙子四月下浣、遣人抵杉山祠、囑僧禱請謝罪、已帰、(43才)五月三日、又招致僧十人、於勾欄上、焚香陳食、点燭七条、誦法華經、俄而無故自滅、

方驚惶四顧之際、屋上驕然有声、梁長六丈余、困本三尺末一尺五寸者、忽自中折、屋宇隨而壞陷者、六十坪許、是日申時、火發北里新蝦屋、風扇而熾、倡樓妓館無一存者、死傷者且百人、新蝦屋主人、即曩日主伐杉山祠樹事者也、主人初為北里蝦屋管店子、素尊信聖天、無幾別自成家、々道豐饒、謂是聖天垂祐之所致、尊信益深、月一浴聖天于油、以報功(43ウ)德、三日哺時方油谷聖天、而火自發天花板上、瞬息蔓延北里中、是以倡妓之属、纔自偷脫、服飾資財、焚燒幾盡、劇場棟折之變、北里回祿之災、發于一日、可知其非偶然也、

冤鬼化虻 (6-28)

勢州神戶城下晒布舖、畜婢三人、其一人新來者、与僕争言、為僕所折辱、憤甚、自殺于河而死、嗣後晒布之地、有虻來集、不知其幾千万、所集樹、至枝被压而低地、又地上有赤色痕一帶、如灑血者、蓋(44才)皆冤鬼使然也、小菅三平説、

地底有声如雷 (6-29)

去村松城八九里所、有祠曰伊夜日子、距海三里、時々地底有声、如疾雷、不知其何物也、俗伝昔日有賊黑鳥者、糾衆而反、官軍討誅之、瘞其首于祠側、如雷之声、即黑鳥之冤鬼為之也、或曰、蓋海潮激入地底之声、是言似得実、加藤茂太郎説、

灯臺自碎 (6-30)

自島津家久討平琉球、琉球永為薩附庸、薩侯歲(44ウ)遣吏更番監其国、至今不變、一歲薩士人某在琉球、買土人女為妾、頗善順事君子、瓜期已至、土人還国、妾猶夜夜默禱于仏堂、以祈土人無恙、而仏堂所設灯臺、無故自碎、更買用其新者、而碎如故、若是者凡七夕、妾知土人必將有凶禍、憂懼殊甚、既而土人船、果遭暴風漂蕩、不知所之、上原鴻説、

捕鬼燐 (6-31)

露木七郎次都下人、頗有胆氣、嘗与其友一人行郊野中、会日已莫、遙見有火团大寸許、飄々然(45才)飛颺空中、二人相謂曰、吾聞鬼燐之属、招之輒來、請試之、七郎次便以所持笠招之、火漸而近、相去僅咫尺、七郎次急脱短襖、掩而取之、持帰家、藏之便室衣厨

中、不許家人妄至、已獨寢其傍、衣厨後壁、与隣家爨室接、明日隣婦人入爨室、將晨炊、覺腥臭異常、甚怪之、即七郎次家人亦然、既而友人至、与之閉戶鎖窓、令室中無少空隙可逸、然後出而視之、有物如豆滓者少許、在短襖中、腥臭撲鼻、不可耐忍、他無所見、臭散衣厨中、所藏衣物、尽至不可復(45ウ)服用、二人共悵然長嘆而已、

土中生魚(6-32)

画工板谷桂意家、有種樹盆、將有所移栽、命翻盆中土於地、土中有物、髣髴類魚形、儒々微動、衆怪之、以盤盛水、投物其中、則澆刺一生魚、眼口鱗鬣、完然悉具、

狸作人言(6-33)

都下吉祥寺中、四方僧徒來學者、相与醴金、招致儒生、聽其講書、儒生之貧而無資者、往々賴以活、(46才)講肆在寺門前、儒生一人、留居或一月以上、予所識犬塚唯助者、亦嘗在此講書、一夕有物入室、在坐隅、其声唔啣、類小兒誦經、逐之去、旋復來、自是無夜不至、唯助甚患苦之、意此必老狐之為、便夜糾衆、令分伏于屋後、頃之果聞唔啣声、於是衆自外填塞罅隙、令無可逸出、然後入、時適夏暑、唯助寢在蚊帳中、衆各手挺刃、大搜室中、物逃入蚊帳中、衆便急斷蚊帳四隅索、唯助匍匐而出、物独在帳中、逃走路絕、衆齊呼曰、狐已在掌握中矣、可速(46ウ)打殺物自帳中哀折曰、某非狐、某非狐、遂捕之、乃彪然一大狸也、偃然已斃、衆知其伴死、以繩緊縛之、將烹而共食、会隣有一老嫗、持粉团一器來獻、哀懇乞狸命、衆不得已、以刀斷其繩、狸蹶然起而逸、其疾如箭、已失矣、其逸也、繩纏前左足者、猶未解、經數日、斷繩尺余者、置在講肆戶外、即向纏前足者也、旁有兔園冊子之斷爛者一本、蓋亦報德之意也、浦井伝藏說、(47才)(47ウ)

〔今齊諧補遺目錄〕

〔紀邸失火之兆

青山侯邸之怪

魂盥手

魂遊行空中

蝦蟆吐涎作火

狼子不可養

鬼託子

蝦蟆吸氣

水虎

番南瓜薯蕷至大

凶夢有応

屍化為石

異人買酒

米鳴

二

四

六

痘神一

三

溺人前兆

龍若君墓

天雨毛

兩頭蛇

白虹貫日

白昼魂出去

牛淵之怪

烈婦之鬼

牽牛花異品

怪婦人

怪婦

蛇護古錢

水虎一

三

五

美濃州仙女

二

巨魚吞人

妖僧

朱籠

大火前兆

大蜘蛛

今齊諧補遺

紀邸失火之兆(7-1)

文政元年某月之夕、紀伊侯邸失火、于時天方下雨、而火勢弥熾、邸中延燒幾尽、前一日、邸中望火樓上木板、無故自鳴、類有人叩之者、拳邸騷擾以為失火、已而寂然、如此者再三、人皆怪之、以為火兆、既而果然、(神原伯修說、)

魂遊行空中(7-2)

一日際晚、荊婦鈴木氏、倚軒而望、駿河台有火二(1才)小团、相隨而飛行、時日雖全沈、猶歷々弃物、而火燦爛耀目蓋人魂也、時鈴木氏姑夫相馬某、及某子婦某氏、並羅疾危劇、方憂慮之際、見此異、鈴木氏殊憂惱、未幾而一人溢焉之報至、実文化十四年間事也、

青山侯邸之怪(7-3)

文政元年、益封津山侯、并前十万石、因割其隣青山侯邸之半以与之、其存者半、則使会津侯、命吏士守之、会津所守正得青山侯之燕寢、吏士方直(1ウ)宿于燕寢之次室、逮夜半聞隔壁寢室中、歌舞糸管之声、琅々錚々、殷地徹耳大駭相与趨入視之、則一無所見、而向之声、更在隔障之外、愈進而愈遠、得在隔壁外聽、竟廢然而返、此非必妖邪之所為、蓋昔日侯家宮人輩、歌舞彈拍之地、故其氣凝而未散也、(牧原直亮說、)

蝦蟆吐涎作火(7-4)

予所識浦井伝藏、与諸友雅集于淀橋之地、際晚見庭砌、草間有一巨蝦蟆、方啗々吐涎、衆謂其謀(2才)食毒癘而致此也、既涎漸積成一团如毯、随昏黑漸生光、入夜蝦蟆不見、而独見涎爛然如火、又少之涎之成团者、乍飛乍下、初離地五六寸、輒落、漸而高、至三四尺而落、漸而高至五六尺、遂翩然飛踰牆而去、入于隣家、衆相与謀而逐欲捕之、既已不知所之、(浦井伝藏說、)

予嘗聞有德大君嘗言、世上所稱人魂者、大抵係蝦蟆所為、就其火之所落而搜索之、往々得蝦蟆腹裂而死者、此言可与浦井所目擊者參(2ウ)改、但伝藏所見似是、独其涎沫飛而蝦蟆不飛、又疑与 有德大君之言、頗不合当質諸博物君子、

魂盪手(7-5)

北村平太之妻嬰疫、一夕危篤、死在須臾、忽然聞目、語傍人曰、吾疾必不救、吾不欲以垢穢之身、歸于天、惟盪手嗽口而願足矣、其速將水來、傍人曰子疾何至于此、今方危劇不可輕有輒動、待少間方可進水、妻請求甚苦、傍人不肯、俄而聞戶外水(3才)鉢有声、如以杓酌水而盪手者、趨出視之、則有一团火、方宛轉、旋繞于水鉢上、女狂而水自濺于庭上、又入而視之、妻昏睡中方按抄手如盪之狀、無幾而絕、(淺間金太郎說、)

狼子不可養(7-6)

伝曰狼子野心、諸獸之子皆可養、独狼子不可養也、嘗有一人、甚愛諸獸、養熊養狼之子各一于家、視之如己子、一日熟寢、三獸皆在于側、忽有物撫其足、不堪痒而悟、甚怪乃更佯熟寐而察之、亦

復如(3ウ)如前、則狼以手觸之也、於是屏氣靜慮以待、即見能欲起攫狼而殺之、蓋狼欲害其主、猿知之而力不能制、故陰攪動主人使悟也、其志亦可憐矣、(樺島石梁說、)

信州松本山中、有人養狼子、其愛之馴狎如貓、以為决無他慮、一日狼子忽然出去、主人方寢、察其有異、藏竹炉于被中、使高如有人寢其中者、而已在梁上以瞰之、已而狼子果大率其類而入室、主人所養之狼、首先向被而齧裂之、(4才)而無人、失望而出去、(鈴木彦次說、)

鬼託子(7-7)

櫛田左伝次妻之姉、適人生子、無幾羅疾、日倍劇、死在旦夕、櫛田妻方憂慮之際、姉突然自外至、見其妹循々然、專以託其子為言、妹意固已疑其非人、且承承不敢忤、少之倏然滅矣、即聞外戶有声、似有人開之者、往而視之、果少開矣、少之姉死之報至、問其終之時、正其來託子之時也、(淺間金太郎說、)

白昼魂出去(7-8)(4ウ)

猪飼親眷某妻某、被疾將死、其家人相与環而視之、即見有一团白煙氣、自其鼻孔出、飄然輕拳、触竹簾徘徊上下、如求出而不能得者、已而由簾隙称広処而出去、無幾而婦人死、(猪飼斗南說、)

蝦蟆吸氣(7-9)

有一士人、夜对灯讀書、俄然灯昏、視之油已殫矣、即瀉油、未幾時灯復昏如前、視之油復尽如前、甚怪之、環視其左右前後、則見有氣有一白虹、成其属乎庭、急点燭出而視之、則有一巨蝦蟆方向灯(5才)吸氣、方知其所為也、(祭酒林公說、)

牛淵之怪(7-10)

高橋弥五左衛門父某、嘗夜半從過田安門外、沿牛淵而行、見婦人被髮踞于堤而臨水、意其或有淫行、得罪于夫、或為舅姑所虐、將投于淵而死也、心憐之、近其人而語曰、吾觀子類將投水死者、蓋必得罪于舅姑及夫也、人命至重、何必自求死、豈別無可處之方乎、請停死、言畢而不応、某再三言如前、少之婦人方回頭回顧、視之面如激丹、眼似猙獰(5ウ)、侷怪全非人也、某驚愕疾走得免、歸家氣息奄々無人色、家人問之不能言、明日方始說所見、(高橋弥五

左衛門、

水虎(7-11)

御留守居室賀山城守步卒某、有所之、夜深而歸過田安門東、見堤上有一童子踞焉、連呼某名、某意此必近地兒、平生所親狎者、試出手援之、彼亦曳之、某素多力、而不能抗、遂為所倒、相与陷於濠、爾時使彼更抱持、某必不免而彼頗畏某有勢(6才)力、亦逃去、於某纔得上岸、疾走抵門、叩門、々々者啓門、見步卒無人色、甚怪之、衆夾持入家、步卒拳体奇臭、不可嚮、邇有傍者、皆為所薰染、步卒昏迷不能言、明日方能言、數日復故、(林祭酒說)、

烈婦之鬼(7-12)

片山鉄之進嫂某氏、既嫁生子、有一富人、欲強得之、重賄某氏、父母、々々眩於財而諾之、召某氏于家、百方開諭、某氏誓死不聽、一日其母及弟、又相与曉譬、某氏力拒如前、遂出走欲踰牆而逃、母及(6才)弟惶遽恐其事白于世、弟便持戟逐之、意蓋欲威而留之、而某氏不少回、遂撞殺之、是夕片山兄方灯下独坐、沈思俄有一婦人、抱見而至、坐于其側、其容慘憺一頼重有愛者、居少之翩然滅矣、方怪其有變、已而果然、(音田巖三說)、

番南瓜薯蕷至大(7-13)

有人說、有商人、以舟積果瓠之屬、至本所、舟中有一番南瓜、其围一丈余、人懼其有毒、不敢買、又莫敢割視者、增島蘭園、嘗行乎市、見人担薯蕷而行、(7才)謂是常州所產、其围四五尺、其長五丈許云、(增島蘭園說)、

牽牛花異品(7-14)

文化文政之間、世人盛尚牽牛花、競以奇品相誇尚、於是異種殊形雜出、望之有絕不類牽牛花者、一日衆會于某寺、競出牽牛花之新奇者、有一人出牽牛花径七八寸者、衆皆駭伏、遂為一坐之冠、少之有一人至、徐自香撞中、出牽牛花、長不過二三寸、而枝葉荳根全然、* 花之蕾者開綻者(7才)無數、衆愈益嘆服、遂奪東方虹之錦、嗚呼世之好尚乃至斯、豈非所謂妖物者歟、

凶夢有応(7-15)

南部駒井理右衛門父孫兵衛、聚某氏孫女為妻、即理右衛門母也、

某氏夫婦甚鐘愛其孫女、無日不訪問、十一月十二日之夕、某氏夢孫女突然來、謂曰、兒若死則請刻法諭於翁媪墓碑之中間、此兒之上願也、蓋某氏時已設壽藏立碑碣、故云然也、某氏既寤、心甚驚訝、急走人詣孫女家、問安否(8才)則理右衛門母方針爾在室、其人還報翁、媪始安、迄十二月十八日、母果無疾而歿、奇矣、翁媪痛念如不欲生、因葬之于所設壽藏中、刻法諭於所立碑上、以成其志云、(駒井理右衛門說)、

怪婦人(7-16)

一夕既過午夜、昇夫二人過狙橋而西、見一婦人姿態艷冶、坐于道旁、心甚怪之、時方盛夏炎熇、因謂此必出外而避暑也、過而不顧、已而婦人亦起行隨之、昇夫心懷畏懼、回顧呵問、婦人謝而問曰、(8才)二君將何所之、二人曰將赴四谷、婦人曰妾亦有所往、徑由四谷、俾弱之質、冒夜而行、不無強暴之懼、誠得賜携、將則何惠如之、詞恭意衰、二人惻然憫之、遂聽其請、相隨而行、至九級坂上、其一人不向四谷、左折而趨田安門、蓋已為妖所惑也、婦人便掉而投之濠中、其一人方驚惶遑巡之際、婦人驟變而為鬼魅、面目猙獰、世所未曾經親、遂吐出火、以蒙被其人、々々駭懼而絕、達番舍人、聞驚叫之声、亟出視之、会其已絕、昇致之舍、医治甚謹、久(9才)之方蘇、然臥病數日、番人亦有嬰疾者、蓋中妖婦之毒也、(斎藤某說)、

屍化為石(7-17)

相州津久井県、名倉村名主源内女阿常、性極誠実、善事父母、年二十六、以文化六年己巳六月二十日病死、葬于向谷之地、至十年十月、其母亦然、葬之於其側、扣土之際、揮釘誤中阿常棺、々破露其屍、檢之屍已枯槁、堅硬如木石然、望之淡黑色、低頭而合掌、豎兩膝而踞、左眼開右眼閉、鼻陷口鉗、(9才)兩耳猶存、眉毛全脫、乳及五臟自然凝固如石、手足爪儼存、無虫不臭、就向嗅之、小作朽木香、叩之如敲木魚、土人乃上聞於県令大貫治右衛門云、(羽倉外記說)、

怪婦(7-18)

豆州三島有人、其子尚幼、近隣一人家女子、頗有姿色、甲以其可

以配子、請而養于家、及長以為配、未幾其子形容枯槁、皮骨相支、其父憂之、密問其故、其子曰不遂吾婦、此患不去、其父便出其婦、々(10才)之東都、仕於品川一商人、頃之近地商人子甲、見而美之、欲娶為妻、父母以其至情不可制遏、遂為娶之、未幾亦復憔悴枯槁、如三島人之子、父母問其所以然、甲曰彼婦而在、吾必不免、父母遂逐之、婦既去、而甲猶鬱鬱不樂、人因勸遊熱海、徜徉山水、以寫憂、甲從之、趣裝而出、以三島有一相識、枉路訪之、主人不在、家人在焉、時日已莫矣、以其相知熟、不復疑、迎而宿之于樓上、夜半風聲颼颼、冷氣襲人、甲不能寐、俄而聞拍地聲、心甚怪之、少(10ウ)啓戸而瞰之、隣則一仏利也、墓碑累累、有物方拍一新塚、瞬息之內、遂出其屍、以口接其臍、而吸其髓、甲大駭映月光熟察之、乃往日所逐之婦也、惶懼戰慄、亟下慘然無復人色、家人詰其故、不敢言、乃居之於樓下、少之起如廁、有人來叩厠戸、屢咳而被叩如故、不得已而啓戸、則亦復嚮之拍墓碑人也、叫呼而走、家人大驚、点燭往視、椽上有足跡、絕不似人、了不知其何怪、後事未聞、(友野雄助說)、

異人買酒(7-19)(11才)

会津盤梯山下、有一酒家住焉、一日有老人、自山中來買酒一升、將以充所携瓢、々極小、不可容一合、店人怪之、謂老人此瓢豈能受一升乎、請假子器之鉅者、老人弗肯曰、此優容一升、無煩假器、便滴酒瓢中、而未始濫溢、主人惶駭、老人辞去、主人便挾僕隸之有胆者一人尾之、入山探討其蹤、老人顧問曰、汝何故從予、僕具吐實、老人曰前途危險、不可進、汝可從此退還、僕唯々從命、且請教、老人曰、予無復可教告汝者、惟有一事試問汝、當時(11ウ)國中鷄必不鼓翼而鳴、僕曰誠若君言、老人曰此人之所疑怪、然實非凶徵、翻属吉兆、今歲必必豐穰、不似客歲之荒歉汝行自驗之、知予言之弗誣、僕愕不敢進而歸、(月上熊八說)、

蛇護古錢(7-20)

田安小十人小林百助子千之助、方幼、一日經小日向三百坂、見蛇十二頭蟠結于地上、三蛇在其上、亦如之、千之助嘗聞、群蛇所聚處、其下必有明珠、趨進以手探之、積蛇沒腕、果有物觸手、出而

視(12才)之、乃宋慶元通寶錢也、蛇既失錢、漸々散去、千之助、一稚子、克不畏蛇、可謂有胆氣、而衆蛇麤集、纔護古錢一文、蓋亦蛇之汚下者也、(勝田弥十郎說)、

米鳴(7-21)

小田原小吏某家、有積粟如于苞、一日粟鳴、其声殷鞀、主人怪之、移粟于別處、命人斷其下、入数尺、無所獲、迺復填上、置如故、而又復鳴、如初、怪而質于占噬者、々々謂此吉兆也、他日当有榮進、或獲財利、焉後事未聞、(岡田左太夫說)、

水虎一(7-22)(12ウ)

肥前州蓮池大橋村有民浅右衛門者、膂力過絶人、長於角觝、一日行河溪、有呼於水心者、諦聽之、知其欲角力、逡巡之際、水虎騰上岸、浅右衛門便与之搏、水虎形短小、輕捷如飛、且遍体黏滑、不可投擲、自股脚間出入、動輒在後、浅右衛門困於接应、气喘力乏、以為彼出我後、必為所制、便背一大木以与之确、然猶不可当、殆將被拽入水、勢蒼急、因出死力、推擠之、而疾走、水虎亦疲憊不能追、(13才)浅右衛門返家数日、顛毛尽墮、蓋中水虎之毒也、(大野五郎左衛門說下同)、

二(7-23)

蓮池士人高木新右衛門、一夕網於河、大獲、便於河畔聶功、將烹而食之、逢有水虎自水中出、手欲掣新右衛門入水、新右衛門便揮所持刀斬之、得其一腕、歸而藏于家、時々出以誇示人、

三(7-24)

佐嘉宗室鍋島山城采邑、德長之地、有民之野、踏(13ウ)筒車以溉田、一水虎歛爾來、求与之角力、奮搏良久、民有力、挫水虎投于地、水虎亡胆而走、然民還家亦發熱譫語、六七日方差、

四(7-25)

肥之多久邑羽間村、農忙家稚子、裁九歲、父母甚鍾愛之、不欲其近危、痛禁出門、嘗欲遊于川、父母不許、一日拳体生熱、鬱悶思欲濯于水以自游、父母猶弗肯、適有隣家兒來誘、欲相伴浴于水、隣兒年稍長、父母以為可託兒、々欲浴之情又殊切、不(14才)得已而可其請、既而不歸、父母怪之、馳往省、則兒已斃于水虎、独

遺屍存、因適隣詰其兒、則是日未嘗出、蓋水虎化隣兒以誘之也、
〔西在三郎説〕、

五 (7-26)

丹波州笹山寒士山本岸右衛門、嘗刈草于水滸、有水虎忽從水底躍出、求与* 或岸右衛門許諾、素聞水虎頭上凹有水、則力不可敵、意欲多方令之乾涸、故喋々不止、水虎亦殊儼嘯、与相応酬、時適盛夏、畏日如疾、水虎頭上不余一滴、岸右衛門(14ウ)門見之急与之搏、水虎勢力易与、遂繫以婦、堅縛于柱、然後詣官長家而告故、未歸、水虎極々罵岸右衛門妻、々不勝怒嗔、以杓盛水而澆之、水虎得水、力頓十倍、曳柱倒之、負而入水、岸右衛門還家悵惋弥日、〔原田元壽説下同〕、

六 (7-27)

笹山有兄弟浴于河者、弟先入水、兄尚坐沙上、弟為衆水虎所围、争曳其足、弟心神乱惑、乾咲不止、兄遙看察其有異、趨往救之、拔白禪灌水中、傷水(15才)虎頗衆水虎又聚、而投兄足遂溺于水、弟見之怒氣填膺、精神頓復、亦極力斫擊、水虎畏避星散、遂得上岸、弟危而克免、兄安而反死、禍福得喪真有非意料所及者、

美濃州仙女 (7-28)

美濃州大垣侯之封、与越前接壤、々地名根尾野村、々畔山有一仙女住焉、初喧伝為齊藤道三之女、審覆之、蓋朝倉義景臣某之女也、義景之敗滅也、某妻方妊、避難于山中、而生女、其女長成于巖(15才)穴中、採食木葉草實以活、迄今茲二百六十歲、而望之若四十許人、狀髮如棕櫚皮、然是歲濃州逢水河決、溢流、屋廬無數、溺死者且八百人、道途往々断絶、尾人聞仙女事、或欲往觀、而礙於水不得前、是以來悉其詳、尾人言之、或伝聞以告予、実甲戌年間事也、〔柔兆闍茂譚奇之一〕、

痘神一 (7-29)

客冬寒威凜冽、為二十年來所未嘗有、迄今茲二月上旬、猶如霽發之候、而客歲秋冬之交、痘瘡行、(16才)至于歲晚益熾、入春未已、大抵險惡、死者如乱麻、但春來病痘者多輕、客冬之季、人或云、都下小兒、斃於痘者、業已躋五万、今茲正月、所識某語予云、深

川靈巖一寺、葬小兒以痘夭者、三千、嗟何其酷也、豈時氣垂愆、故痘亦從而險歟、人有譚痘神者、厥事頗怪漫録以資博聞、

舟子某家於本所四目之地、一日以舟送人、自柳橋回棹返家、方抵一目、有人從岸上喚舟子、索附載、婦舟達四目、已諧僦便上舟、時已昏黑不復弁(16ウ)識其人狀貌、既入舟相嚮邇、舟子靜察之、蒼然一老叟也、面目猙獰可憎、心惶惱、面詰其所往、老叟曰予痘神也、將之四目舟人某家、殺其小兒、其所指名即是舟子也、聞之大憂慮、姑陽為不知、徐諷之曰、無知小兒、令之陷乎死、亦可哀、何不求濟活之方、老叟曰吾固知某惟一子、且極鍾愛之、但渠丁当死之期、吾職当殺之、断不得縱舍、舟甫達四目、某疾声呼其妻、々秉燭走出迎、燭光逆映、老叟形色益瞭然可認、某急拏棹竿、極力折之、老叟溺水、凜然有声、把燭視之、惟有神幣及米空苞(17才)而已、是夕兒果亡、

二 (7-30)

一顯貴人兒病痘、兒極幼、平素絕不知金錢為何物、至此乞金二方於父母、々々便与之、兒又請以此金換錢、父母復可其請、兒愛翫不暫釈手、其母問故、兒曰予乞兒也、安得不愛錢乎、母大憤罵曰、吾家隆赫、乞兒安得憑吾兒乎、兒聞之似溟溟不服者、是夕痘毒內訶遂死、巨儒某子痘瘡、亦索金二方、且請換錢、全与貴顯人兒同、既而痘良已、錢(17ウ)癖亦止、爾時侍御医某來施治、及差語其家人曰、令息痘神必由顯貴人之家來也、不然何相肖之甚也、因說顯貴人兒之詳、以為君家不罵痘神、故得追於死也、

三 (7-31)

本所船夫兒嬰痘、頗危急、一夕船夫妻夢見一婦人、面目青鰲、髮如蓬、衣如懸鶉、謂己曰、吾痘神也、蒙命当殺兒八人、殺一人輒得青銅一百、今已殺七人、誠得汝兒則數盈矣、所慨吾身姓變、不可触(18才)犯明神、汝家神擁佑、是不得入、可恨、々々、因切齒憤悒、連三夕所全同、最後則婦人望々出去狀、既寤檢枕畔、獲青錢一百、心殊怪之、自此痘勢漸佳、遂得全愈、既而以錢所由獲甚怪、不敢費散、施之於隣近解魔法師家、

巨魚吞人 (7-32)

近江州大湖、一日有巨鮎魚自死、而浮於水面、長三丈許、剖腹檢視、得一男子尸、肌肉爛盡、筋骸呈露、独所著衣、儼然不壞、探其懷、獲円金三百塊、豈(18ウ)鮎魚不堪金氣之極冷而斃歟、斯男有許多金、不能享一日之樂、而死於鱗介、亦薄命之極也、

溺人前兆 (7-33)

武州平井村農夫、有一男某、財九歲、父善相人、夙察子有水厄、常曰、之子年躋十歲、當使抵都下為人僕隸、此地臨大川、朝夕翔翔水瀨、不可以居子也、且痛禁其子、不得游泳、見其游水必怒而譴之、子懼不敢近水、而日見村中諸兒浴於河、不勝技癢、間竊往而與游、還將達家、以幌巾拒拭面目及(19才)頭髮、令無一点濕可認、而後入家、以故其父不悟、久之事泄、父怒甚譙呵切至、嗣後出戶、必印其股令人水、々跡不容少掩、而某猶不能悔、今茲六月十七日與同里諸兒游於河、諸兒皆工於泅水、而某独拙、逡巡之際、急溺於深淵而死、索其屍不獲、大会漁人、百方搜索、至明日始獲其屍、又明日予抵平井村、將命漁子網魚、而漁子往々困憊、不欲応命、詢其故、里中豪農源右衛門、為予說溺兒事、如此、而某父以蚩々農氓、而前識如神、亦奇矣、(19ウ)

妖僧 (7-34)

本所某寺有某州僧來寓、為人行呪、人翕然信之、增島孟鞏嘗再過寺門、來請者成市、停竹兜子無數、一日獲利五十金、以上、既而姦露、為吏所縛執下獄、詢其故、則曰僧之行呪也、延有病患者、抵宇內幽黯之地、不許其携將婢僕、令病者枕々而臥、手自案其胸腹、傍立一象、人略如人大、面目宛然如生、僧謂將移汝疾於象人、病者頓覺疾痛霍然如洗、又謂象人亦不可使之受病長困、便取炷艾(20才)灸象人数壯、灸痕紅腫出膿、如生人然、既而云、汝病根斷無遺、勿以為憂、衆咸神而信之、崇仰日深、而婦女輩由此往々為其所淫汚、可怪又可惡、僧財物悉設入宦、留役某因得目擊象人、驚其狀貌奇絶、以為此必獲之于外国、断非邦人所克製造也、

龍若君墓 (7-35)

相模州小田原侯封内、酒匂川之西、山王原、有農忙戸八者、戸八所有之地、有小丘、々上有古墓凡(20ウ)七、々墓皆有碑碣、文

字漫漶不可弁議、土人相沿稱為龍若君之廟云、一日戸八隣近民某、倏爾發狂、似有神憑其身、詣一人家、自踞上坐、而言曰、亟喚村中名主組頭來、吾將有教命、拳家察其動作失常、答以名主組頭適遠行不在家、某曰、審爾則當呼其人、在名主組頭之次、又克判決曲直、而來望之、聳所扼腕、眼光炯々射人、勢不可遏、衆不得已、招致村長一兩輩、某曰汝等矜傲之甚、當亟下堂而土上坐、村長怖懼、唯命、某曰、吾意在懲後來、(21才)是以明諭汝輩、當敬而能受、我即上杉龍若丸也、伊人在我廟前、有無礼之拳、故吾勦絶之命、自今而後、慎勿復冒行非礼、發言之際、怒色艶爾、又具陳為北条氏所滅、積憤深怨顛末、言訖謂曰亟亟予將去、衆便開戸、某出戸、僅三四步、欻然踏地而死、其所謂無礼者、蓋指某是日墓前小洩也、拳村大恐、謀建祠而崇之為神、実文政三四年間事也、迄七年甲申、始相与請于小田原侯邸、後事未聞、按龍若丸上杉憲政子、天文十二年棄上野州(21ウ)山城々、出奔相模州山王原村、為北条氏康所殺、距今茲甲申、実二百七十三年而威靈赫灼若此可謂奇矣、

朱鼈 (7-36)

而御番建部六左衛門家僕、過礪川上、見童子弄鼈、々色如楮、心甚異之、詢其所獲之地、答曰、獲之此水畔、僕便以孔方若干買之、持而歸、鼈形不甚鉅、而渾身朱殷、如灘血、四足双眼亦皆赤色、亦奇矣、或云、以其狀絶奇、故以呈台覽、淮南子曰、朱鼈(22才)浮波、必有大雨、今秋淫霖、郡国洪水、斯其応也、

天雨毛 (7-37)

八月十四日晨、駛雨如注、已霽而龍口桜田赤坂茗水等地、雨毛甚多、有人袖來示我、長短不齊、間有盈尺者、色則或純白、或灰色、粗似馬鬣、而不如馬鬣之鉅且韌、了不可知其為何獸毛也、或云是日赤坂門外賈人家孥、仰空見一巨獸騰空而行、其形類火、蓋此獸所遺也、

大火前兆 (7-38) (22ウ)

十二月五日之夕、幸橋門外二葉坊遺火、風扇而熾、延燒芝坊、至仙台侯邸、咸為燬燼、実称春來大火、小城侯邸在幸橋門外、予所

識侯臣田中九十九者、前大火數日、在邸中長屋、開窓望行客、時正卯辰之際、有一白狐、自城內入傍小城邸而過、其疾如箭、適有行人數輩、皆驚顧叫曰、狐過矣此地為穀擊肩摩之區、又當白日昭々之時、而有此亦怪矣、爾時九十九、便以語人、知其有災殃、但狐自城外入城內、故謂其災必在城外、而城內無恙、可(23才)以高枕、既而果然、

兩頭蛇(7-39)

冬月、宦命癡人徒、濬治本所豎川、有卯之助者與焉、在壹橋之東、方把勦浚泥沙、有物窒鋤端而出、視之兩頭蛇也、一頭較小、蒼色綠理、長三尺許、行人齷齪觀之、吏乃藏之于大木廠、不許人窺、且以其異、亟鳴之宦、實十一月廿四日也、既而有人欲買之十金、蓋將開場觀於人、以罔利也、占稱見兩頭蛇者死、故孫叔敖殺而埋之、以代衆死、古來噴(23ウ)々拳為美譚、今乃至有得之以為活計者、雖古今綿邈、何某人心之霄淵懸殊也、予亡友渡辺武緒、嘗見之于神田門之外、予已載今齊諧中、增島蘭蘭母、嘗抵城北志村之地、土人有畜兩頭蛇者、行德之地、有一素封家、貯之籠中、一頭頗小、与壹橋東所獲同、友人細井某、語予、某所識人目擊之、曩日東叡山下、有得兩頭蛇、誇示人以射利者、此皆在豎川兩頭蛇之前、是凡有五兩頭也、亡論其不能致人于死、意亦天壤間、常有之物也、(24才)

本草綱目、兩頭蛇、時珍曰、按爾雅、中央有枳首蛇、中國之異氣也、劉恂嶺表錄云、嶺外極多、長尺余、大如小指、背有錦文、腹下鮮紅、人視為常、不以為異、羅願爾雅翼云、寧國甚多、數十同穴、黑鱗白章、又一種、夏日雨後出、如蚯蚓大、有鱗、其尾如首、亦名兩頭蛇、又張來雜志云、黃州兩頭蛇、一名山蚓云、是老蚓所化、行不類蛇、宛耕甚鈍、此即羅氏所云者也、韶州多兩頭蛇、為蟻封以避水、蟻封者、蟻封聚(24ウ)土為台也、蒼梧亦多兩頭蛇、長過一二尺、或云蚯蚓所化、出嶺南異物志、(太平廣記)、

大蜘蛛(7-40)

客歲(庚寅)世人戲作詩、有越後土蛛眼照闇句、其他所詠事、皆

得之伝聞、独此一事未詳、既而有人來語予曰、越後之地有獵夫入山、縱目遠望、有山峯羅列而其數贏一、從來所未嘗觀、心怪之、諦視則其中有光、爛々如電、知其非山、便以銃擊之、中山忽亡、經數日往視、則有一大蜘蛛死、此詩之所詠(25才)也、云今茲(辛卯)紀州安藤帶刀采邑土人兩輩、入山採菌、頗有所獲、而未憊意、更進二町、則有以極多菌得名之地、甲欲進、而乙疲倦不能行、踞地而憩、使甲獨進、甲大獲菌而還故處、便見乙遍体被物、如大帽絮然、而業已氣息奄奄不能言動、甲大驚四顧、則傍有一大蜘蛛守之、身大四尺許、足長倍之、甲欲以刀斫之、而其勢焰猛烈、不可嚮近、乃走下山、大糾合里人、多持弓銃鎗刀以往、大蜘蛛猶在、以銃打之斃、而乙併不得其屍、蓋為蜘蛛所噬(25ウ)吞也、(小笠原奎藏說、

白虹貫日(7-41)

天保戊戌九月十七日、有白虹貫日之異、都下不見、太田錦城子遮那四郎、于時在上州吾妻見之、以書報都下知旧、且函所見來寄、如左、既而聞西州人祇役都下者、歸國至金川、亦見此異、是歲十月廿三日、仙台有三日並出、有兩日並出、此亦都下不得見、此等異使在古昔、必怪訝以為巨變、在于今日天變詳明之日、則固不足奇也、但(26才)此碧落中、邪沴之氣、凝聚使然、已如三日果出、天豈有三箇太陽、日暉映氣而致然也、晋建興*年
古人之論大都如此、予門生江木某、嘗有所適、亦見兩日並出、衆方來指為異事、既而氣散則弗見、予意堯時十日並出、亦洪水浚、沴氣凝聚、日映之而為十也、(26ウ)

(たかはし・あきひこ 近世国文学)
(平成十二年十月二十七日受理)